

トム・ウェイツ 素面の、酔いどれ天使

パトリック・ハンフリーズ=著 金原瑞人=訳 | ¥2,730 | 東邦出版



無二の個性を35年にわたって振りまいてきたトム・ウェイツの最新評伝。アルバム、そしてある時期から活発化する映画出演作品などを丹念に追いながら、さまざまな紙誌に残したインタビュー、コメント類を集め、彼の活動を立体的に浮かび上がらせていく。以前出ていた『トム・ウェイツ 酔いどれ天使の唄』（大栄出版）の著者が、89年で終わっていた前作以後の18年間を書き加え（この時期の活動がいかに多彩かつ爽りの多いかはファンはよくご存じのはずだ）上梓したものの翻訳で、改訂版とは言っても根本的なスタイルを踏襲している程度で、まったく

新しいものと考えた方がいい。膨大な量の資料を積み重ね、精力的に濾過することで染み落ちたエキスの表面にウェイツというアーティストが浮かび上がる。さながら92年の快作『ボーン・マシーン』のジャケットを文字で再現したかのようだ。

アーティストとしてのルーツに始まり、各時代の状況、そして78年の映画『パラダイス・アレイ』を出発点に、音楽活動と並行する役者としての活動にも幅広い知識をもって考察を重ねていく著者の視点とトム自身の発言が、まるでラップの掛け合いのように共鳴しあっている瞬間もあり、愛情と理解の深さがよくわかる。そして特筆すべきは日本版の丁寧な編集ぶり、一例で言えばウェイツの発言を太文字にしているおかげで、それだけを追ってもまた違った一冊の本を読んだ気分になれ、長く、深く楽しめる一冊となっている。（大鷹俊一）

名曲悪口事典

—ベートーヴェン以降の名曲悪評集

ニコラス・スロニムスキー=編 | ¥3,465 | 音楽之友社



ベートーヴェン以降の作曲家——ショパン、ワーグナー、ブッチェリ、ラフマニノフらへの批評を、偏見だらけ、不公平、ときには的外れなものまでわざと引用する。この本がおもしろいのは、集められた毒舌が、ときにその批評における想像力や創意工夫において、知的な魅力が伴うものが多いからだ。音楽は変化してゆく芸術であるゆえ先駆者、天才の仕事は理解されにくいのだ。音楽史としても、音楽批評の歴史としても、きわめて史料価値の高い一冊。

my favorite of US Records

小尾隆=著 | ¥2,940 | 春日出版



なけなしのお金で買ったレコードに針を下ろす瞬間のドキドキ、それはまさに至福のとき。60-70s世代にとっては、忘れられない感覚なのだ。そんな思いを胸に、音楽ライター小尾隆が自身の音楽遍歴に沿って、“レコジャケ”をフルカラーで紹介。本書はそのUS版だ。曲目やプロデューサーなどの詳細データはきっちり、ジャケットの美しさはゆとり見せていく。地域や町ごとに楽しめる構成で、ぶらりUS紀行気分。

エイジア

ヒート・オブ・ザ・モーメント

デヴィッド・ギャラント=著 金子みちる/宮坂聖一=訳 | ¥2,940 | マーキー・インコーポレイティド



エイジアのファンだった筆者が、ジェフ・ダウンズと知り合い、年代記編者として付き添うことに。メンバーの発言を織り交ぜながら、エイジアの軌跡を熱く追いかけた本書。83年のオリジナル・ラインナップ崩壊から2006年の再結成の真相まで、ファンが知りたいエイジアのすべてを、生々しく描き出している。初期2作品の収録曲をメンバー自らが解説した付録もいいが、全盛期と現在の写真を並べて配置したグラビア・ページもすごいぞ！

サウンド・バイツ

フランツ・フェルディナンドの世界グルメツアー

アレックス・カブラノス=著 実川元子=訳 | ¥1,890 | 白水社



世界的に人気のグラスゴー発4人組ロック・バンドのヴォーカル、アレックスによる世界ツアー手記、というかタイトルのとおりグルメ・ツアー日記。英『ザ・ガーディアン』紙に連載されていたコラムをまとめたもので、大半がB級グルメの珍道中。ちなみに日本では幕の内弁当とフグが登場。ツアー・メンバーであるアンドリュー・ノウルズのイラストもなかなかいい感じ。巻末にはご丁寧に、登場したレストラン＆ショップのガイドが付いています。

明日の言付け

—青窈=著 | ¥1,399 | 河出書房新社



現在のJ-POP界のなかでも、とくに言葉を大事にしているミュージシャンの一人、青窈の初となる単行本。優しさと愛に満ちた、彼女ならではの視点で切り取ったさまざまな日常が、エッセイと詩で紡がれる。誰でも持っている家族や愛しい人への思いを、彼女にしかできない、独特の語彙とリズムで表現している。亡くなった父や悲しみを共有した母にまつわるエピソードは、とくに胸に響く。読んだあと、きっと大切な誰かに会いたくなるはず。

レコードマップ '08-'09

編集工房 球=編 | ¥1,995 | 学陽書房



超ド定番。レコード/CD好きなら一家に一冊（だった）レコード・ショップのタウンページ、最新版が出ました。一瞬、“まだ出てるんだねー”（失礼）と思ったりもしたが、手にとってパラパラながめると、やっぱりそれだけでワクワクしてきちゃうのだ。でも、ネットで情報を得ると、この本でチェックするのが、実際まったくちがう行為だってこと、本誌読者なら実感できますよね？ 鈴木慶一のロング・インタビュー付き。